

Japanese Literature

5



現代日本の文学

島崎藤村集

〈監修委員〉

伊藤 整

井上 靖

川端 康成

三島由紀夫

〈編集委員〉

足立 卷一

奥野 健男

尾崎 秀樹

北 杜 夫

（五十音順）

学習研究社

現代日本の文学

5

島崎藤村集

全50巻

分割払価格 39,000円

現金価格 35,500円

昭和44年11月1日 初版発行

昭和48年2月1日 六版発行

著者 島崎藤村

発行者 古岡秀

発行所 株式会社学習研究社

東京都大田区上池台4-4

郵便番号 145 振替東京1293

電話 東京(720)1111 (大代表)

印刷 大日本印刷株式会社

中央精版印刷株式会社

製本 中央精版印刷株式会社

本文用紙 三菱製紙株式会社

表紙クロス 東洋クロス株式会社

製函 日本紙パルプ商事株式会社

*この本に関するお問合せやミスなどがありましたら、
文書は東京都大田区上池台4丁目40番5号(〒145) 学習研究社
「ユーザー・サービス本部事務局」現代日本の文学係
電話は、東京(03) 720-1111 内線352,353か、東京(03) 727-1600へお願いします。

© 1969 Printed in Japan

0393-164 605-100

島崎藤村文学紀行

木曽馬籠部落の朝



木曽路はすべて山の中である。あるところは岨づたいに行く岸の道であり、あるところは数十間の深さに臨む木曽川の岸であり、あるところは山の尾をめぐる谷の入口である。

(「夜明け前」)



右 冬の馬籠部落。旧中山道より、美濃の平野を望む。
「私の田舎は高い山の端で、一段ずつ石垣を築いて、その上に村落を造ったような位置にあります。私の家はその中央にありました」
——（「幼き日」）

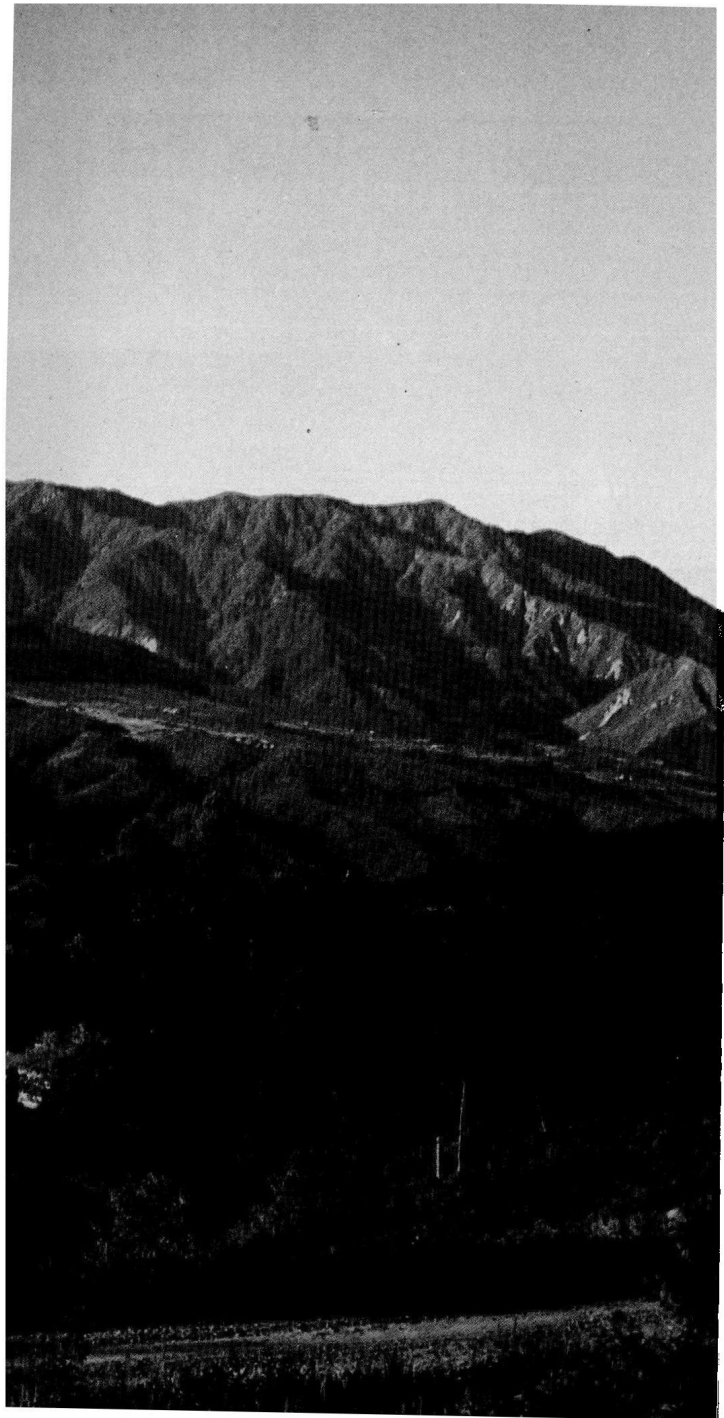


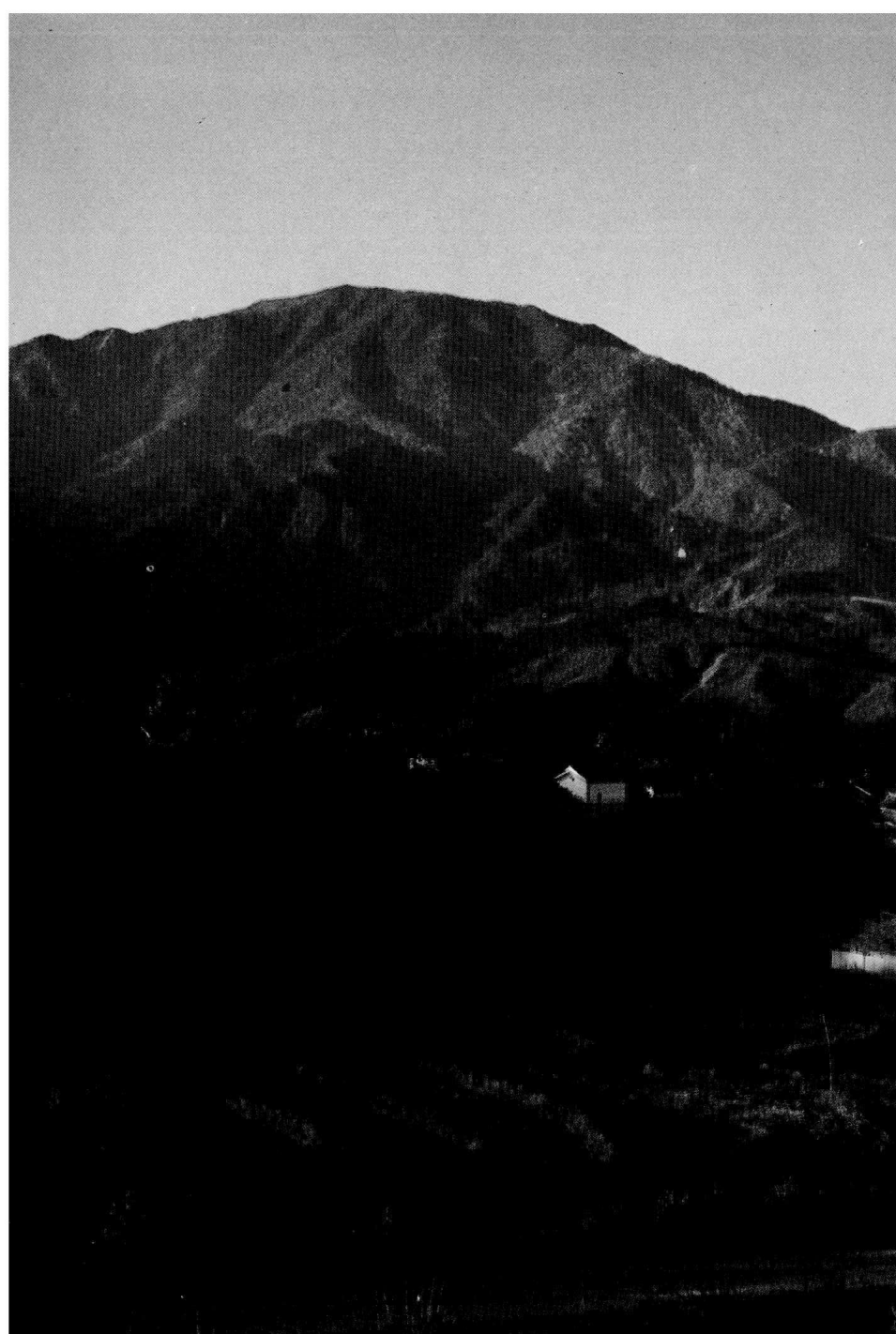
雪の恵那山

恵那山と馬籠部落の遠望。

彼の心は何年となく思出しもしなかった遠い山のかなたに狐火の燃える子供の時の空の方へ帰って行つた。山には狼の話が残り、畠には貉や狸が顕われ、禽獣の世界と接近して居たような不思議な山村の生活の方へ帰って行つた。

（「桜の実の熟する時」）

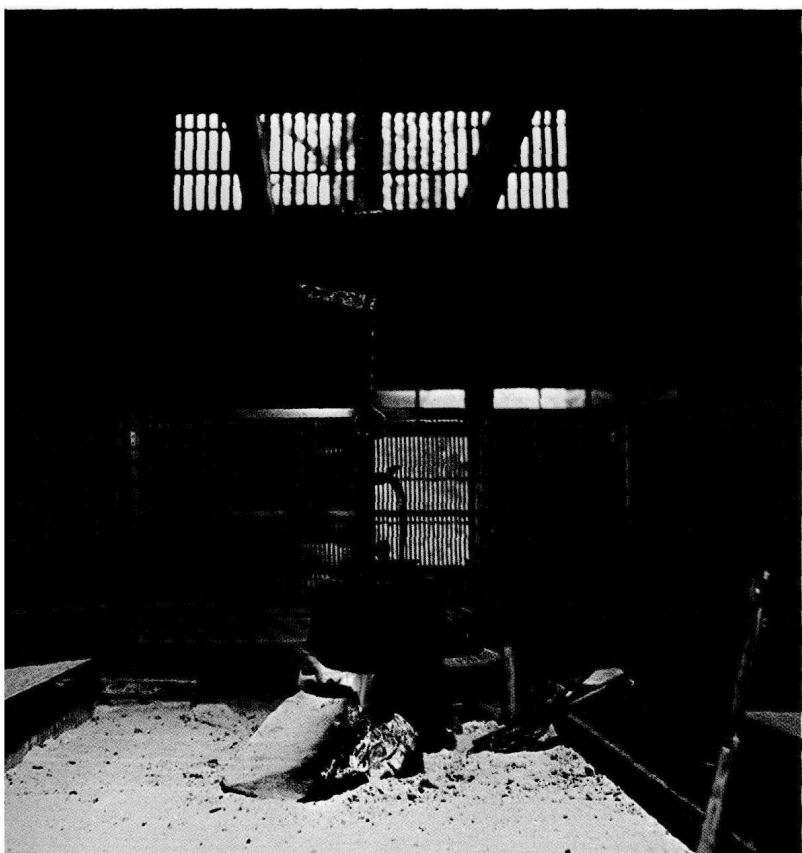
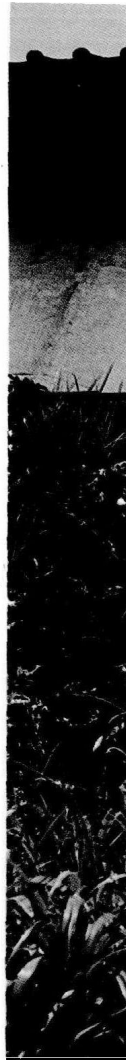


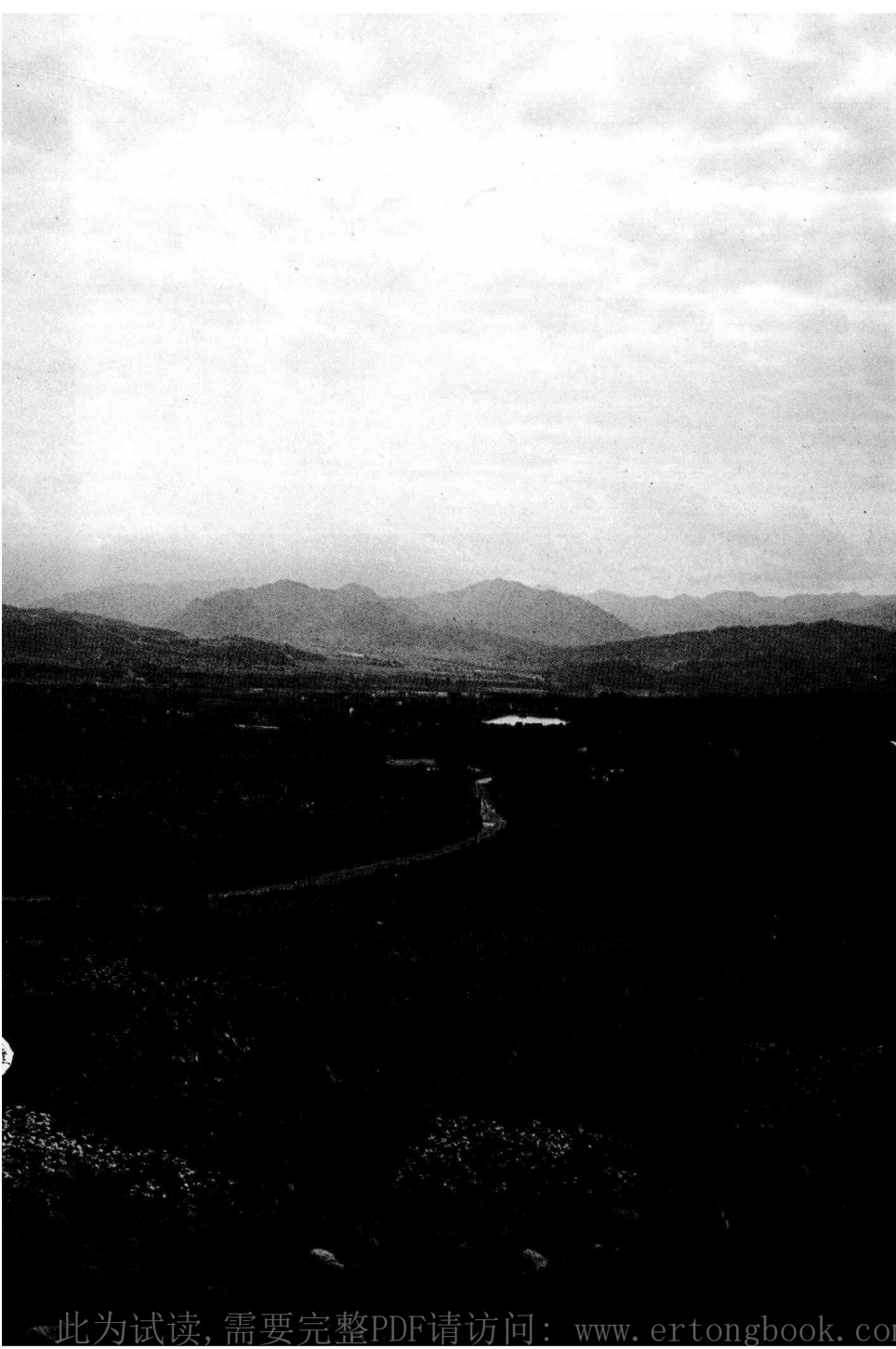




草茂る妻籠・光徳寺の石垣

旧妻籠脇本陣「奥谷」の囲炉裏端。
妻籠は木曾十一宿の一つ、馬籠の
隣宿であり、往昔の木曾街道の歴
史の跡が深く刻みこまれている。
「夜明け前」に登場する「妻籠脇
本陣の扇屋得右衛門」は、この脇
本陣三代前の当主。





眼前に展る郊外の景色を眺めると、種々の追憶は丑松の胸の中を往たり来たりする。丁度斯うして、田圃の側に寝そべり乍ら、収穫の光景を眺めた彼の無邪気な少年の時代を憶

出した。烏帽子一帯の山脈の傾斜を憶出した。其傾斜に連なる田畠と石垣とを憶出した。

(「破戒」)
烏帽子山麓姫子沢付近より、海のように広がる小県の野を望む。

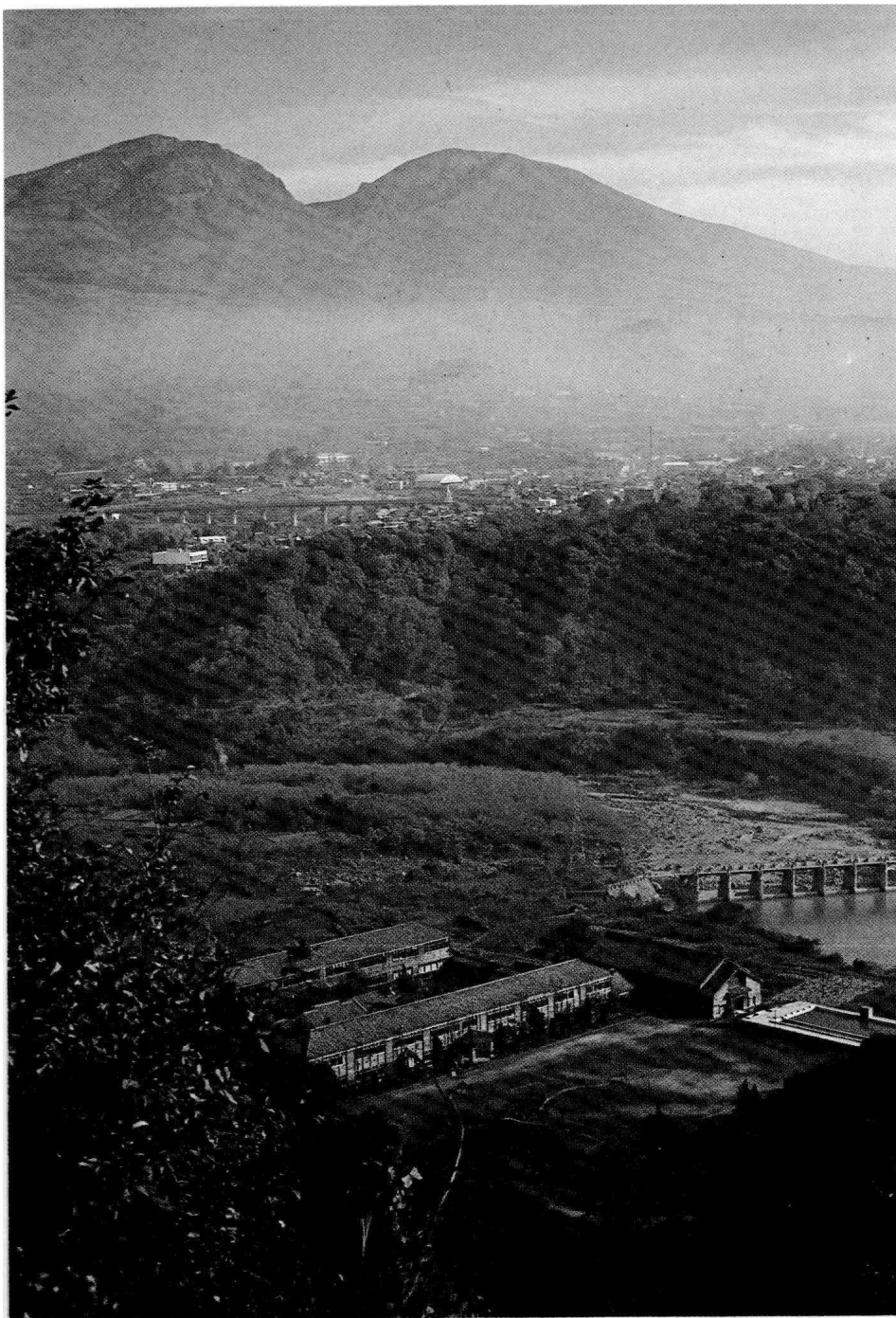




今でも私は千曲川の川上から川下までを生々と眼の前に見ることが出来る。あの浅間の麓の岩石の多い傾斜のところに身を置くような気がする。あの土のにおいを嗅ぐような気がする。

(千曲川のスケッチ)

右 小諸市外の千曲川。左 千曲川をはさみ、懐古園の森、浅間山の眺望。





昨日またかくてありけり
 今日もまたかくてありなむ
 この命なをめいぞうを醒めざ醒め
 明日をのみ思ひわづらふ

いくたびか栄枯の夢の
 消え残る谷に下りて
 河波のいざよふ見れば
 砂まじり水巻き帰る

嗚呼古城なにをか語り
 岸の波なにをか答ふ
 過すし世を静かに思へ
 百年もきのふのごとし

(千曲川旅情の歌)



雪の懷古園



海の荒れる前かあるいは荒れた後かには、荒
浜の方で鳴る海の音が名掛町の宿までよく聞
えてきた。（「早春」）